

企画
部会

〜ご命日に聞く〜

その人を介して
仏さんに相對する

夫Aさん(71才)と妻Bさん(66才)は平成23年に父(92才)を、平成10年には中学卒業を間近にした長男(15才)を亡くされた。

11月10日が父の、3月12日が長男の祥月命日である。

Aさんの妹Cさん(69才)を交えてお話しを聞かせていただく。

― 今日11月10日。おじいちゃんの祥月命日をお迎えしています。おじいちゃんはこういう方でしたか。

A うちの父は生まれは大正だけれど、考えは明治の考え。男が一番という感じで。孫もやっぱ男が生まれた時はこの上ない喜びがあったんではないかと。病氣自体は「白血病」、骨髄性だったかな。余命三カ月って言われたんです。あれが6月だったよね、確か。ずっと入院してたんですけれども、途中でもう

「退院したい、退院したい」と執拗に言っていて。9月に入ってから退院してきて、ずっと家で療養していたんです。亡くなる当日は、すごくお天気の良い日です。その日の夜暗くなって、「トイレに行きたい。オシッコに行きたい」って言って。車椅子でトイレに行くと、「終わったかい」って聞いたたら、「終わったあ」って言って。そして、戸を開けて車椅子に乗せたくらいからちよつとおかしくなっちゃったんだよね。で、急いでベッドへ行って寝かしてあげたんですけれども、もうそれ位で意識がなくなつて。

― 病名はご本人も知っていたってことですよ。3カ月ということも知ってたんですか。

B バッチリ、病院の先生が本人を前にして言っていたの。例えば、それを言われた時に

本人は…。

B 私の第一印象は、家に帰ってきたら、あのおじいちゃんがすごいハイテンションになつてた。

A あの後、一週間位は結構…。

B たぶんね、まだまだ生きようと思つてたんだと思うの。それが、いつになくハイテンションになつていて。こんなじいちゃん見たの初めてだなつていう印象は残つてる。

― 親が今そういう病気で3カ月ではないかと聞いた時はどうでしたか。

B 私、息子亡くなった時に家で死なせてやりたかつたなと思つて。ずっと外泊は多かつたんだけど、最後はやっぱり病院だったから。だから、おじいちゃんが病院が嫌で家に帰りたいと思つたら、それも良いなと思つた。

― おじいちゃんね、おばあちゃんと一緒ににお寺に来てくれてたというの、孫さんを亡くしてつていうことがきっかけで。

A まあ、家は浄土真宗、お東だつて、それは言つてたけれども。せいぜい、お盆の墓参りくらいで。

C 私もだから、「えっ、コロリと変わつて、お寺ばかり、またお寺行つて。えっ、冬のこんな時も。お正月の時に夜中に行くでしょう。大した若くもないのに、そんなことまでしなくていいのにな」とか思つてたことはあつたよ。

― おじいちゃん、おばあちゃんの姿がどう映つてました。

B おじいちゃんは、凝り出すつていたらおかしいけれど、始まつたら熱心だから。

A だから、書籍も結構ある。

C お母さんも言つてたよ、「お寺行かんかつて言うけれども、眠たいし、寝たら怒るし」つて。それこそ、孫が亡くなったことをきつかけにお参りはしてたよね。だから、それまでとは全然違うから。よく行つてたから凄いなつて。

A だから、お寺のお参りに行つての説教を録音してきてるんだよね。そのテープがすごい量あつたよね。こんな菓子箱一つにビッシリとあつたから。

― 今、Aさんご自身がお寺に足を運んでくださるようになって、その時の父親の姿に対して何か思うことはありますか。

A 父親が亡くなつてから、母親をお参りの時に連れて行つて、縁があつて役を引き受けたりして、お寺に行くことが多くなつ

たよね。

B でも、その姿はやっぱりおじいちゃんに似てるよね、お寺に通ってるのは。

A そして、横で家内はばあさんと同じで「何でそんなに行くの。この忙しいのに」って。

I 最後の質問ですけれども、今日がじいちゃんの祥月命日ですよ。3月12日が息子さんの命日。あなたにとって命日とはどういう日ですか。

B 何か心が重くなってくる、毎年。おじいちゃんの時というより、息子の時は特にね。一週間くらい前から、何でか分からないけど重くなる。今もだんだんね、20年も経てば少し違うけど…。おじいちゃんが亡くなって、どうなんだろうね。おじいちゃんの名日という時には、少し綺麗にしなきゃとか、そういうふうな頭になっちゃうんだけど。
I 20年来、息子さんの命日を迎える一週間前から抱えてきた重さって、どういう重さですか。

B まずは亡くなる時のことを思い出したり。Cさんお見舞いに来てくれる時に、「俺、死ぬのかな」って言ったの知ってる？

C 何か記憶あるよ、私。
B 私、あの時、聞こえないフリしたの。もう目つぶって、もう

目も開けなかったんだけど。あの時、「何馬鹿なこと言ってるの」と言えば良かったのかなとかね、色々考えたりね。そういうことばかり命日近くなったら思い出す。

A 自分はやっぱり、祥月命日までにこれこれをして全部片付けたいと。そして、祥月命日を迎えた後、その後は次の事に進むんだけれども。息子の亡くなった日までにこれを進めておけば、次の作業が楽になるな。そういうような一つの区切りって言ったらいいかね。そういう一つの区切りの目安の日になってるような感じがするよね。

B 祥月命日終わったら、ちょっと気が楽になるんだよね。普通の、毎月のは全然気持ちが変わるというのかね。

A 説教の話で、浄土真宗は願い事をするのではないと言ってるから。要するに、それによって仏さんに、その人を介して仏さんに相對すると言ったらいいかね。だから、まあ結果的には自問自答みたいなもんで。

C 父親が亡くなってから、命日ってというのが自分の中では自分を省みる機会ができていいっていうか。

B 子どもひとり育て上げるのも大変だけど、人ひとり亡くなっ

ていくのも大変なことだよ。

「あの目力の強い男性はどういう方ですか。ジッと真剣に聞いておられるから、話をしているこちらも姿勢を正される思いでした」。布教使の先生が御法話の後に漏らされた一言である。その男性とは他でもないAさんの父親。御孫さんを亡くされた後、お寺に足繁く通われ始めた頃のことである。談笑している時、眼鏡の奥に見える笑い皺の寄った細い眼。その瞳には真実に出遇いたいという真剣さを湛えていたように思う。

今回お話しを伺う中で、場の空気と皆の表情が一変した瞬間があった。Bさんが「俺、死ぬのかな」という息子さんの言葉を口にした時である。Aさんも、Bさんも、Cさんも…。皆、息子さんが残した「俺、死ぬのかな」という言葉に揺り動かされて生きている。それはまた、祖父であるAさんの父もそうであったのだろう。御法話を、全身を耳にして聞き続けておられたそのお姿に思う。

「またまさしくみずから法をときてきかするひとならねども、法をかきかする縁となるひとをも善知識となづく。」（『浄土真要鈔』）

（文責 赤松範秀）

『北海真宗』11月号より不定期連載となる「ご命日に聞く」をご清覧いただき、ありがとうございます。この度の連載につきまして「ご命日」という言葉は宗祖親鸞聖人（及び御歴代）の御命日に使ってきた伝統的の了解があり、ご門徒を始めとする有縁の方に同様の言葉を使うのはどうでしょうか」との声が寄せられました。

連載に先立ち部会内では、「ご命日」と平仮名表記とすることで、宗祖の「御命日」との使い分けをすることが話し合われたことでもあります。

今回お寄せいただいた声を受け、再度協議を行いました。有縁の方の命日を「ご命日」と呼ぶのは、真宗の教えを確かめ合った宗祖の「御命日」の歴史に連なることを願いとすること。空過していく日暮らしにあつて、親しき方を亡くした日がわが身の「後生の一大事」を問う如来の御催促、如来の御教化であること。本連載がそのことを確かめ合える場となることを願いと、「ご命日」という表記とすることを確認させていただきました。今回お寄せいただいた声、私たちが自身の取り組みを確かめ合う機縁となりましたことに感謝申し上げますと共に、今後とも様々なお声を頂戴しながら歩んでまいりたいと思えます。